

「食と農」の博物館

展示案内 No.67

展示期間 ■ 2014.3.28～2014.9.15

東京農業大学「食と農」の博物館
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL.03-5477-4033
FAX.03-3439-6528

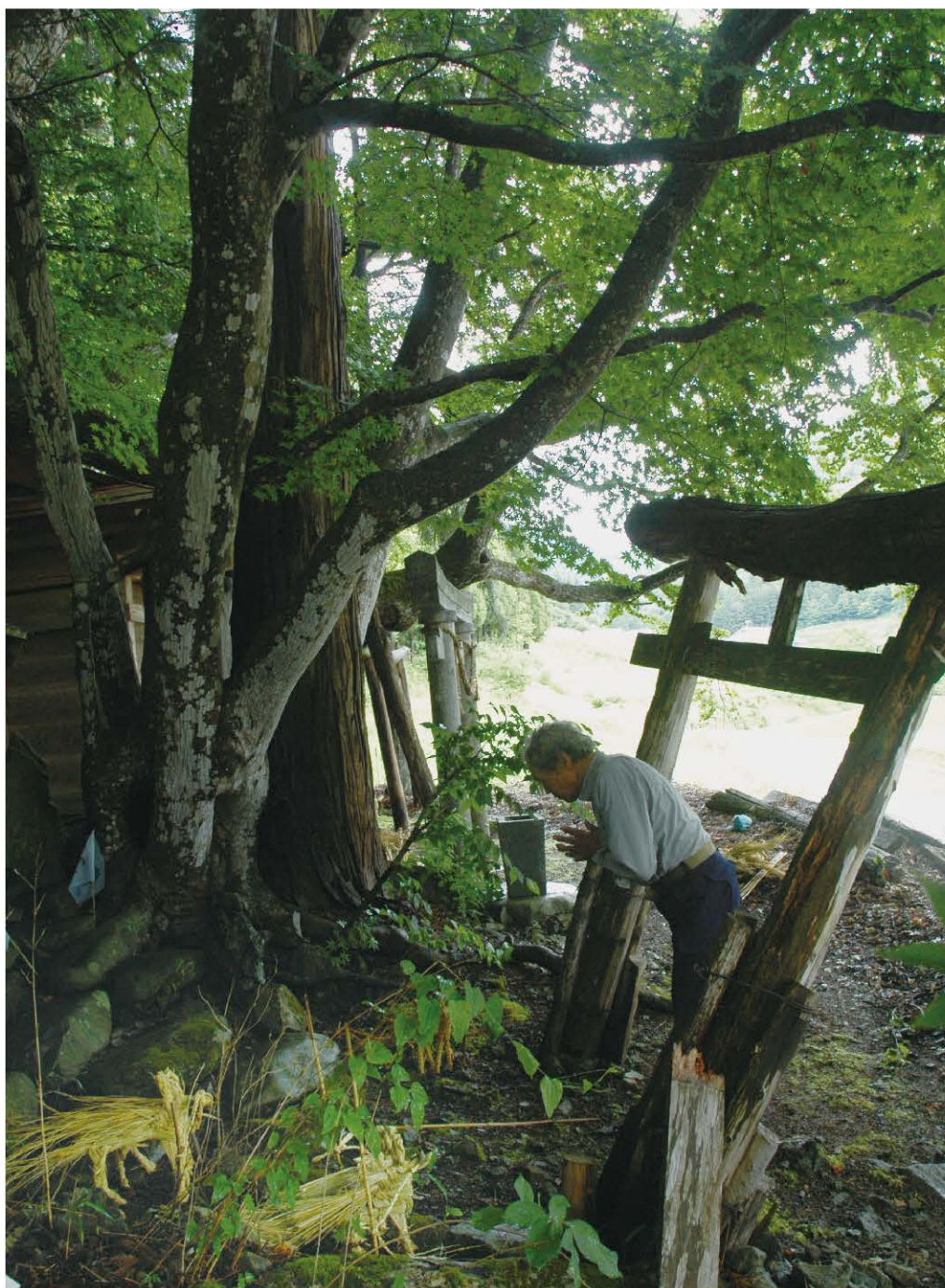
開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)
休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)

開館10周年記念展示

農と祈り——田の馬、神の馬

主催 東京農業大学「食と農」の博物館

共催 東京農業大学学術情報課程と履修生



馬っこつなぎ・岩手県花巻市大迫町内川目

In Prayer and in Plough: The Presence of Horse and Cattle in Fields and Shrines

開催にあたり

記紀に見る農と馬との関わりは、畔を崩し、馬の皮を投げこんだサノオの蛮行に象徴的に表されているといえます。現代の様変わりした農業を目の前にして、古代から近世までの自然と農について考えを巡らす事は、なかなか難しいかもしれません。しかし、祭祀や伝承あるいは年中行事の中に、歴史の遥か彼方からほんの百数十年前まで、神々の名で呼ばれていた自然と農の濃密な関係を見る事ができます。

人々は自然現象の驚異的な力に畏怖の念を抱きながら、それを己が力として取り入れ、あるいは慰め、もてなす事で神々の守護を得る。そして論理的に解明することで、災いから逃れ、幸運を得ようとする。我々の祖先は実に逞しく世界と対峙してきたのではないのでしょうか。彼らの労働の傍らに寄り添い、かつ神と人との媒介の役目も担ったのが馬でした。馬は人間に労力を提供し祈りを司る、両義性を持つ動物だったのです。

本展では、農と信仰の関係を、馬を仲立ちとした構図でとらえました。多くの場合、それは祈りの形として現れ、現代が試行錯誤する共生の問題に一石を投じるであろうと思います。また、本学の前身である東京高等農学校長・田中芳男による、伊勢神宮・神宮農業博物館設立のための、2万点に及ぶ農具収集も、神々への祈りと農との深い関係を再認識させる物に他なりません。

減反や機械化による糞不足のため、祭礼用の糞馬が作れず、また少子化で祭事が存続できないといった実態は、身近な生活から又一つ祈りの場が失われて行くような焦燥感を覚えます。本館開館10周年を迎えて、本展が人と農との関係、共生と祈りという根源的な問題に対する手掛かりの一助になれば、これに勝る喜びはありません。

東京農業大学「食と農」の博物館
館長 小泉 幸道

平成26年3月28日

馬の精神史

琉球大学名誉教授

小島 瓊禮

天の斑馬の素性

1万年以上前、フランスやスペインにある旧石器時代の洞窟の壁に描かれた馬は、狩猟の対象の獣であったと考えられている。やがて馬は家畜化され、運搬や農耕の作業を助ける動物になるが、人間の精神世界においては、そうした自然の力の利用ばかりではなく、神秘的な役割もになっている。

神の馬というと、神の乗り物という連想がはたらく。たしかに日光の二荒山神社の祭礼の渡御の儀式のように、神座を表わす御幣を鞍の上につけた神馬3頭が連なる例もある。しかしさまざまな古来の儀礼には、生きた馬そのままではなく、殺害などの作法をとまなうことも少なくない。

日本の最古の馬の文献である『古事記』（712年）や『日本書紀』（720年）にみえる、日本神話に登場する「天の斑馬」もその例である。「天の」は

天上世界の、「斑馬」は斑毛の馬ということであろう。いわゆる天の岩屋神話の段である。太陽の神である姉のアマテラスの稲の水田耕作やその収穫儀礼の準備を弟のスサノヲが妨害する物語であるが、そこでスサノヲは天の斑馬の毛皮を「生け剥ぎ」（生きたままはぐ）「逆剥ぎ」（作法と反対の順にはぐ）して、アマテラスの機織り屋に投げこんでいる。

この天の岩屋神話は、乱暴をしたスサノヲをケガレの象徴として追放する、ケガレをハラウ祓え儀礼の起源神話になっている。朝廷の儀式でいえば、8月や、それを月次とって6月と12月にも実施する大祓えの由来談である。平安時代初期の『延喜式』に見えるこの月次の大祓えの儀式にも、馬一頭を牽き出す作法がある。天の斑馬は、この祓えのしるしの馬に相当する。

8月の大祓えは、平安時代以降の制度では、天皇一代に一度の11月の大嘗祭に先立つ行事になっているが、その古い例は『日本書紀』天武天皇5年(676)8月16日の条にある。この年は大嘗祭はなく、毎年11月におこなう新嘗祭に対する大祓えである。『日本書紀』には、このあと同10年(681)7月30日と朱鳥元年(686)7月3日の条にも、国家的な大祓えがみえる。上代の朝廷は、7・8月に大祓えをおこなっていたらしい。

天武天皇5年の大祓えの記事には、その実態がくわしい。国をあげての儀式で、ハラヘツモノ（祓えのしるしの物）は、国造（国を代表する役職）は馬一匹など、郡の長官は刀一口など、戸ごとには麻一束を納めるとある。これから類推すると、天の斑馬もハラヘツモノの馬にちがいない。祓えというと、身を清める作法と感じている人が多いが、それをおして願いをすることが主眼であった。『日本書紀』の



〈参考資料〉スサノオの蛮行(部分)「古事記絵詞」山辺神社蔵

■ 特別寄稿

朝廷の記事では、願いごとのために神社で大祓えをしたときに、寺院では悔過けいかをおこなっている。悔過も文字は過あやまちを悔くいすることであるが、願いごとに目的があった。天の岩屋神話では、アマテラスは稲の豊作を願っていたはずである。

馬と新年儀礼

8月1日は八朔はっさくなどと称して、古くから特別な物日になっていた。古典の記事を事項別に集めた神宮司庁編『古事類苑』では、「歳時部」の「八朔」の項に、行事の概要を次のようにまとめている。八朔は8月1日に物品を贈答して祝う。タノミの節ともいう。タノミとは「田の実」とか「頼み」の意味であるという。朝廷や幕府でこの式をするようになったのは、鎌倉時代のころという。

「田の実」とは稲のことで、この日に穂の出た稲の成熟を祈る行事が西日本では盛んで、これを作さく頼たのみともいっていた。この解説は、あたかも農民の行事が朝廷や幕府などに及んだとも読め、きわめて民俗学的な発想法にもみえる。しかし、西日本を中心に、八朔を馬節供などといって、馬の形の団子

や人形を供える習慣が少なかったことを、無視することはできない。

『日本書紀』天武天皇5年8月などの大祓えの記事では、祓えのしるしの代表が馬で、それが8月の行事であった。八朔の馬節供がこれと歴史的に無関係であるとは、とうていおもえない。一戸ごとに麻一束を納めることもある。この一戸一戸におよぶ大祓えの行事が、村々の歳事習俗の源流になっているとみることできる。

琉球諸島でも、村の祭祀がきわめて体系的に伝わっていた沖縄県島尻郡の久高島では、8月12日にティーラーガーミ（太陽神）と呼ぶ行事があった。島の51歳から70歳までの男たちが行列をなし、村の中心の道を通って島の最高の祭祀場まで歩く。この行事を主宰するソールイガナシー（棹取りさま）2人は、島でもっとも権威ある男の村役で、2頭の白い馬の霊威をうけているという。この日の早朝にはその馬が島を左まわりにまわるといい、神事でうたう歌には、馬が島で跳ねることがよまれている。

島の人たちは、この行事は祓えであるという。馬が主題の祓えを太陽神と呼ぶとは、まるで天の岩屋神話の意義を宗教的に分析して構成した儀礼いらいにみえる。天の岩屋神話は、稲の収穫儀礼である「新嘗にいなめ」の物語になっていて、冬至の儀式の神話ではないかともいわれる。冬至は1年の切れ目になり、ヨーロッパの暦法は冬至新年の形をとっていた。久高島の「太陽神」は、琉球諸島一般の8月新年と一連の行事であった。

8月新年は、いわば春分と秋分を1年の2度の切れ目にする観念の秋分新年であった。奈良時代の『養老令』の「考課令」や『令義解』のその注釈によると、官人の勤務評定の1年は8月1日から7月30日までであった。幕府や祇園などで、八朔の日が主従の挨拶の日になっていたのは、その余風であろう。琉球諸島の8月新年も、古代日本のこの暦法の遺習にちがいない。

飼葉桶の中の赤子

ヨーロッパでは、教会から各家庭まで、クリスマスのおときに、飼葉桶の中に赤子を寝かせた人形を飾る風習がある。『新約聖書』がいう、キリストは馬屋で生まれたという物語を表わすが、日本の雛人形



福岡県芦屋町・八朔の藁馬

のように、工芸的にも工夫があって興味深い。毎年、屋根裏部屋などにしまっておくものを出して飾るといい、雛人形の習俗に似る。ドイツ語圏では、これをクリッペ(飼葉桶)と呼ぶ。フランスにもある。

日本の村には、馬屋で出産をしたという伝えがある。福井県敦賀市の滋賀県境の村では、昔はニワか馬屋にワラを敷いて産褥をととのえたという。沖縄県島尻郡には、昔は馬屋でニクブク(敷物)を敷いて出産したと伝えている人がある。この村には、産褥で母親を亡くした赤子を、死ねばよいと馬小屋に投げこんでおいたという話がある。赤子は元気に泣いているので助け出され、100歳を越える天寿をまっとうしている。明治41年のことである。馬屋での出産をしのばせる。

妊婦が馬の手縄をまたぐことを忌む風習は、日本本土にも南北に点在し、琉球諸島では濃密に分布する。その理由は明確ではないが、馬屋を産屋にすることがあったとするとよくわかる。岩手県遠野市には、出産のとき、夫などが馬に鞍を置いて、お産の神である山の神を迎えに行く習俗があった。馬が歩くにまかせて山に入り、止まったりすると、そこで神が乗ったとして家に帰ったという。一見、馬は神の乗り物であるが、馬屋が産屋であるとすると、ことは単純ではない。

『日本書紀』には、聖徳太子の名を、「厩戸皇子^{うまやとのみこ}」と記し、母妃が「厩戸」で安産したとある。馬屋での出産を肯定的にみる観念で、キリストの誕生説話と、同一類型であることは否定できない。

中国の正史『三国志』『魏志』巻30「夫余伝」に引く『魏略』(3世紀ごろ)にいう「旧志」に、夫余の初代王の東明は、高麗^{こうらい}之国の王の侍女が生んだ子で、王は赤子を殺そうと豚小屋や馬小屋に捨てるが、死ななかったとある。かの沖縄県の赤子の話と共通する。馬を人間の運命と結びつける観念があり、それは馬を祓えのしるしとする信仰と、一つのことであったかもしれない。

馬の精神文化は、ユーラシアに共通している。ヨーロッパには、広く新年に相当するクリスマス前後、十二夜のころに、馬に乗った一群の不思議な猟師たちが来訪するという信仰があった。それを、宗教史学者のミルチャ・エリアーデは、新年とは無時間の時間で、生者と死者が一つになる宗教表象であるとした。そこに馬が登場するのは、日本の8月新年が馬を祓えの象徴にしたことに通じる。馬には、世界を一新する機能があるという信仰があったのであろう。

東アジアの儀礼の馬は、犠牲として殺害される。天の斑馬もその例である。かつて狩猟の対象であった時代に、馬を解体したことの反復にみえる。馬から恵みを得るところに、祓えの更新=再生の思想が生まれているのであろう。飼育して利用しながら、狩猟獣としての側面が生きている。馬の飼育も、本来は儀礼のために発生したのかもしれない。



馬の飼葉桶

参考文献

- 小島環禮「柳田國男の歴史科学思想—春秋新年への遡及を考える—」『成城大学民俗学研究所紀要』第37集 成城大学民俗学研究所 2014年
Colleselli, Franz. *Tiroler Volkskunstmuseum : Fuhre durch die Krippenabteilung, Trioler Volkskunstmuseums*, 1978

田の馬

馬頭観音

馬は農家にとっては家族の一員でした。農地の耕作から物の運搬まで、馬は農家の重要な機動力でした。村の神々をまつる道の辻や、馬が倒れた道端などには、馬を供養する石の馬頭観音像をよくみかけます。インドを起源とする馬頭観音(梵名 ハヤグリーバ)信仰が日本で盛んになるのは、平安時代後期とされています。海難を救済する力を持つ観音であり、また六道に輪廻するすべての生き物の救済者である六観音の一尊として、さらには各地の神々の本地仏として信仰を集めるようになります。

頭上に白馬の首を頂いているため、近世以降、農村地域を中心に馬(牛)の守護神として祀られるという日本独自の形が普及しました。馬の頭が乗ってあればどんな仏像でも馬頭観音であったという村もあります。

駒形大神

駒形の神は、岩手県奥州市水沢区の駒形神社が有名です。古く朝廷の史書『文徳実録』仁寿元年(851)に駒形の神に正五位を授けたとあります。もとは駒ヶ岳の山上にあった神社で、山は駒形山とも呼びます。駒形とは本来、山に馬の雪形が現れることに由来する呼称で、馬の神霊が鎮まる山という信仰が生まれたのでしょうか。一般には馬と蚕の守り神になっていますが、それはオシラ神信仰と同じく、馬から蚕が生まれたという伝えなどがもとと考えられます。中部から東北にかけて、オコマサマなどと呼ばれて広く信仰されています。



〈参考写真〉栃木県那須町・多馬頭を頂く像塔(明治年間)・(栗田直次郎氏提供)



盛岡市・芋田蒼前駒形神社絵札
奥州市牛の博物館蔵

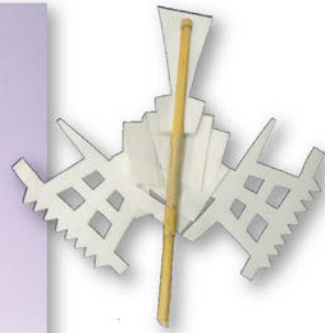


南部駒形踊りの馬形
馬の博物館蔵



江釣子・八坂神社の
具象御幣「蒼前神」

馬養生雛形(江戸時代)
馬の博物館蔵



蒼前神

東北から関東にかけて信仰される、ショウゼン、ソウゼンと呼ばれる馬の守護神は、「勝膳」「蒼前」などと漢字表記されますが、馬の爪(蹄)を切ることを「ソウゼン(爪揃)を取る」と言います。農作業の繁忙期が過ぎた頃など年数回、馬の健康管理を目的とした「馬繕い」が行われ、削蹄や笹針による瀉血、焼絡治療などが行われました。村人の協同作業とするところもありましたが、元は馬医(伯楽・博勞)が行いました。「爪揃」などという漢語はこうした職業的な人たちの用語かもしれません。

田の神のもとで働いた馬の血には、特別の呪力があるとされ、この血で書いた鳥居の絵図を蒼前神や駒形神に祀り、血のついた縄や角材を、門口に飾る風習などもありました。



早池峰神社
駒曳き猿の護符

厩猿あるいは猿と馬

江戸時代、各地の猿曳きは、厩をまわって猿を舞わせ、馬の病や災いを除く祈禱をしていました。その猿引きの守護神も勝膳神と呼び、その祈禱経典を「勝膳経」と言いました。勝膳神は、厩を祭る猿曳きなどによって広められた神でしょう。猿曳きは馬の病気の治療もしたようです。厩猿は馬のお守りとして、厩の梁の上などに置かれる猿の頭です(コラム1「厩猿」10~11頁参照)。

猿と馬の親密

な関係を表す事例は数多く、「厩祭」として猿曳きが厩を祈禱し、「猿曳駒」の絵馬を配る行事や、輸送に使う荷鞍の前輪・後輪に猿の意匠を施し、また「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

して猿曳きが厩を祈禱し、「猿曳駒」の絵馬を配る行事や、輸送に使う荷鞍の前輪・後輪に猿の意匠を施し、また「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

また、「括り猿」をつける風習もありました。馬の守護神として一緒に飼う習俗もあり、福島では生きた猿のかわりに木製の猿形を厩に祀る地域も残っています。また、猿の手骨を民家に吊し、あるいは花嫁道具の中に入れる習慣も東北や九州地方を中心にみられ、人や馬の安産、作物豊作、魔除けとして使われました。

厩猿・奥州市牛の博物館蔵



オシラ神 —— 馬と蚕

オシラ神は、関東・東北地方に養蚕神として広く祀られています。岩手県北部の南部藩では、娘と結婚して殺された牡馬から、馬頭の虫(蚕)が生まれたという由来で、先端に馬の頭や娘の顔などを刻んだ桑の枝に着物のように布を1年に1枚ずつ重ねたものを、オシラ神の神体として、家々で祀っています(コラム2「馬と人の恋——『遠野物語』とオシラ神をめぐる』12頁参照)。オシラ神の祭日は、1・3・9月16日が目立ちますが、この日は平安時代初期から稲と絹を重要な奉納物とした伊勢神宮の神嘗祭に相当するため、オシラ神は伊勢神宮の信仰と深く結びついて広まったと考えられます。また養蚕の行事に午の日を選び、働き手に午歳の女性を好む習俗もありました。関東・近畿地方では、馬鳴菩薩も養蚕神として祀られ、その図像を配布する社寺も多くありました。



オシラ神(オコネサマ)昭和30年代製作
遠野市立博物館蔵



寂光院・馬鳴菩薩御影

牛頭天王

ごすてんのう

牛頭天王は、インドの仏寺、祇園精舎の守護神ゴーズが起源とされる説があります。陰陽道では天道神と同一視され、道教の影響を受け、神仏習合により、薬師如来の垂迹であるとともに、スサノオの本地とされました。京都の祇園社(八坂神社)の主神で、その姿は中世の「祇園牛頭天王縁起」には、7歳の時に身長7尺5寸、頂に3尺の牛の頭を持ち、3尺の赤い角があったといいます。父、武塔天王の没後、大王になり牛頭天王と号しました。疫除け神として全国的に信仰を集め、津島市の津島神社や姫路市の廣峯神社でも牛頭天王を祀り、蘇民将来護符などが頒布されています。津島市興禅寺の牛頭天王像は牛と馬の頭を含む多頭の姿を持っています。祭日は6月15日で、水の神の色彩が強く、胡瓜を川に流すなどの疫を払う行事もあります。

明治以降、牛頭天王は多くの寺社でスサノオと分離され姿を消しましたが、兵庫県の清荒神きよこうじんでは、牛馬守り札に姿を見せています。

廣峯神社
疫除けの輪守り



八坂神社 蘇民将来護符



津島神社
蘇民将来護符



蘇民将来子孫也





『牛馬放生仁徳誠』嘉永元年(1848)刊
 森泉治郎右工門晴吉著・東京農業大学図書館蔵
 本書では牛馬の尊い因縁を説き、飼主の心を和げ、粗末にとりあつかう事を戒めています。「老年馬放生極楽の場所」と「牛馬地獄の有様」の2点の色刷り絵からは、当時の牛馬への愛護精神推奨と仏教の地獄思想における因果応報説が、民間へ浸透している様子が分かります。

顔馬・提馬

馬に災いを起こす、霊異あるいは病気「^{だいば}提馬・^{ぎば}顔馬」の伝えが、東北、関東、中部、近畿、四国地方などにあります。いずれの伝えにも共通するのは、「ダイバ風」あるいは「カマイタチ」などの辻風や旋風に巻き込まれた馬が、突然死んだり、魔物が鼻から入って尻に抜けて使い物にならなくなったりすることです。

これを防ぐ手段として、刀を抜き、馬の上を払って光明真言を唱える方法、馬の耳を切る方法、馬を左に向け、馬子が着ている半纏あるいは風呂敷を馬の頭に被せ、馬の尻の百会の穴に針を打つ方法、「大津東町上下仕合」、「大津東町」、「大津東町馬神」などと染め抜かれた腹当てを馬に付ける方法、あるいは葬式の天蓋の紅絹の布の切れ端をタテゴ(頭絡)に結び着けておく方法、上岡観音のササを食べさせる方法などがあったようです。

腹当てについては、大津の皮剥ぎ職人の娘が家業の仕事が減ることを恐れ、ギバになって馬を殺して歩くのだが、この腹当てを付けていれば、自分のところの馬と心得て殺さないといいます。

大津市の長等神社の脇には、かつて東町から移された興生相生大神宮を祀る馬神社があります。東町には大津宿の人馬継立の馬会所などがあり、本神社は疫病除の神として、役馬の馬持ちらの厚い信仰を集めており、馬用、厩用のギバ除けのお守りも配布していました。他にも、大津東町を、茨城県北茨木市の大津町と解釈する説などもあります。



「大津東町」が染め抜かれた馬の腹当て



松倉山観音・紙絵馬
 (素玄寺発行)



絵馬

牛馬の健康を祈って厩に絵馬を掛ける習慣は現在も多く残っています。飛騨の松倉山観音堂(馬頭観音・素玄寺)や東松山の岡上観音(馬頭観音・妙安寺)では、縁日にたつ絵馬市で買い求めた絵馬を祈祷した後持ち帰り、厩や家内に収める習俗が継承されています。松倉山では、江戸時代後期、牛馬を連れて参詣する代わりに、絵馬を携えて参詣するようになったといえます。

願いごとをするために、板に願いに因む絵を描いた絵馬を神社や寺院に奉納する習慣は、今日でもめずらしくありません。本来は馬の絵を描いたので「絵馬」と称したようです。奈良時代の遺跡から馬の板絵の他、土製の馬「土馬」が数多く発掘されています。この土馬が絵馬の原形であったと考えられています。古代には大祓の行事のときに、祓のために土の馬を用いたようですが、祓とは、みずからの身を清めて願いごとをする行事でした。現代でも八朔の行事に馬の形をつくる習慣に生きています(特別寄稿「馬の精神史」2~4頁参照)。

古式絵馬「向かい天狗」(複製)・馬の博物館蔵
火災除け・魔除けの他、青竹に挟んで田畑に立て豊作を祈ったともいいます

復活した水神への祈り

祈雨祈晴に馬を神に供えたのも、馬を祓のしるしとして神に奉げ、願いを成就しようとしたのです。『日本書紀』皇極天皇元年(642)に、雨乞いのために牛馬を犠牲にする記述がありますが、その時、寺々では「悔過^{けか}」をしています。悔過もやはり仏教では身を清めて願いごとをすることです。

水神(龍神)を祀る奈良・丹生川神社では、朝廷よりの奉幣・献馬の祈願が、応仁の乱までの125年間に96回も行われました。祈雨のために黒馬を、祈晴のためには白馬や赤馬が、日蝕には赤馬が献上されていました。平成24年、東日本大震災と紀伊大水害を機に、途絶えていたこの黒馬と白馬の献上の儀が570年ぶりに復活しました。



丹生川上神社中社での神馬奉納2012年10月16日
(奈良新聞社提供)



馬の膽結石・馬の博物館蔵
雨乞いの儀式には牛馬の他に、「うまのたま」なども用いられたという。



丹生川上神社下社・復元絵馬・原品 日笠フシンダ
遺跡出土(奈良時代)

厩の守り神 「厩猿」

奥州市牛の博物館
上席主任学芸員

川田 啓介

仏教系や神道系とは別に「厩猿」による牛馬守護の信仰がかつて全国的な広がりで行われていた。猿の頭蓋骨や手(足)を厩などに祭るもので、青森県から熊本県まで、88の事例が確認されている。猿の頭蓋骨を祭るに至った経緯がほとんど伝承されておらず、失われつつある民間信仰だが、岩手県奥州市から19事例が報告されており、注目される。

猿と馬の関係については、陰陽五行説により火の旺気にあたる午、すなわち馬が常時住む厩をその象徴とし、火の気による日照りを中和する呪術として水を生む猿が厩祈禱に登場する。江戸時代には、徳川將軍家出入りの滝口長太夫によって正月・五月・九月に猿を伴った厩祈禱が行われており、これを十二支に置き換えれば、寅・午・戌で火の三合となることから、これが陰陽道に基づいた呪術であることは明らかである。

一方、猿の頭蓋骨(厩猿)を祭る信仰については文献上の記録が殆どない。しかしながら、牛の飼育地帯である西日本にも厩猿信仰が存在することから、生きた猿を厩に繋ぐという陰陽道の呪術とは別

の信仰であることが考えられる。頭蓋骨に関する口承は、牛馬の守り、人の健康、魔物除け、防火、作物豊作および縁起物に整理することができるが、最も多いものは「牛馬の守り」であり、「魔物除け(悪霊が去る)」も含めると75%が厩に住んでいる家畜

の守護となっている。厩猿の中には生首を祀ったのではないかとされるミイラ状のものも含まれており、厩にやってくる悪しき物を威嚇する効果は十分にあったであろう。特に「馬の出産時、血のにおいをかぎつけて群がる狼の被害から仔馬を守るため」という奥州市江刺区の中山健一氏の口承から、厩猿が頭骨信仰や精霊信仰に基づく「厩の魔よけ」であった可能性が指摘できる。

また、奥州市胆沢区の千田テル氏は「猿に山に逃げた馬を探してくれと頼んだら、蛇を馬の口に巻いて連れてきた。

それで猿を馬の守り神として祀っている。」という。これは明らかに陰陽五行の呪術である。巳は金の生氣であることから、蛇は金属製の「轡」の象徴であろう。生きている猿に対する呪術が猿の頭蓋骨を祀る厩猿信仰に適用された背景には、所有者

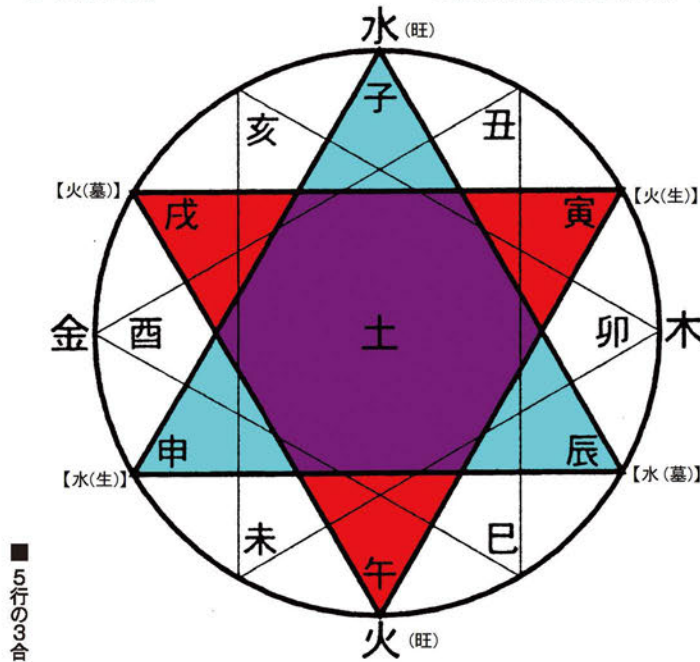


厩猿(奥州市江刺区)

の心の中に生まれた「厩を守ってくれるお猿さん（厩猿）」に対する愛着があり、厩猿を生きている猿と同様に扱うようになった結果、陰陽五行思想や蒼前神、山神（作神）としての猿と習合し、現在に見るような防火や作物豊作などを包含する複雑な厩猿信仰が成立したのではないだろうか。

なお、厩猿のほとんどは頭蓋骨だが、手または足も13事例が報告されており、その多くは左側の手足である。口承では嫁入り道具、安産、豊作祈願、盗品失品返、防火、牛馬の守り、魔物除けなどで、人の生活に関する願いが多く含まれている。これを厩猿の研究者であった故中村民彦氏は頭蓋骨と手骨の使い分けと考察したが、厩や牛舎以外から発見された猿の手は本質的に厩猿とは異なる信仰として、分けてとらえるべきであろう。

厩猿信仰がいつから始まったのかは明らかではないが、明治時代に入ると次第に廃れていったようである。その要因のひとつとして村田銃が普及したことがあげられる。奥州市江刺区の菊池夙氏によれば「猿皮三十文、身は六十文、頭十五（個）で百文、うるがうるがうった（たくさん売った）」という口承があったという。猿を買い付ける人々の存在がうかがえるとともに猿にかなりの狩猟圧がかかったことは明らかである。これにより東北地方の猿は下北半島や五葉山など一部を残して絶滅し、その結果として猿の頭蓋骨が入手できなくなったとも考えられる。奥州市には、今でも牛が飼育されている牛舎に祭られた厩猿が2件ある。そこには、馬産地が牛の産地となっても変わらず、家畜の安全を願う人々の願いが込められている。



■ 5行の3合



猿の左手 奥州市牛の博物館蔵

参考文献

飯田道夫『猿回しの系図』人間社 2010年
 奥州市牛の博物館編『厩の記憶』奥州市牛の博物館 2010年
 吉野裕子『十二支一易・五行と日本の民俗』人文書院 1994年

馬と人の恋

『遠野物語』と
オシラ神を
めぐって

遠野文化研究センター学芸員
前川さおり

オシラ神は、関東地方から東北地方にかけて信仰される民俗神である。養蚕神や目の神、家の神、一年の吉凶を「お知らせ(予言)」をする神とも言われる。東北地方では布をまとった2体1対の桑の木
の棒状の神像、関東地方では桑の枝を手にした騎馬女神像として表現される場合が多い。

岩手県遠野市では69軒の旧家がオシラ神を所蔵している。オシラ神は、ふだん箱に収納されていて祭日に出し、新しい布を着せて家の中に祭壇を作って安置し、主婦を中心に家族・親類たちで拝む。

オシラ神の存在は、明治43年(1910)に出版された柳田國男の『遠野物語』によって広く世に知られるようになった。『遠野物語』は、河童や天狗、ザシキワラシといった岩手県遠野地方に伝わる不思議な伝承を記した日本民俗学の古典である。

『遠野物語』の中でも、オシラ神の由来を伝える物語は、ひととき印象的である。昔あるところに、貧しい百姓が、美しい一人娘と一匹のオス馬と暮らしていた。いつしか娘はこの馬を愛し、ある日ついに馬と娘は夫婦となる。これを知った父は、馬を桑の木につり下げて殺し、娘は馬の首にすがりついて嘆き悲しむ。父はさらに斧で馬の首を切り落とし、娘はたちまち馬の首に乗って昇天し、オシラサマという神となった、という。「遠野物語拾遺」の類話には、父の暮らしが困らないように娘は、馬頭を持つ虫(蚕)を授けるといってお告げをして天に去って行ったとも伝えている。

この物語は、イタコなどの東北地方の巫女たちによって、祭祀の唱え言である「オシラ祭文」として伝承されてきた。日本では限られた地域で

伝承されてきた「オシラ祭文」ではあるが、これと類似する説話が、4世紀半ば頃に著された中国の志怪小説集『搜神記』にも見られる。オシラ祭文の源流の一つは中国にあり、アジア的な広がりをもつ物語でもあったと考えられる。しかし、現代においてはイタコが減少し、伝承は衰退しつつある。遠野でもオシラ神を祀る巫女は、存在しない。

その一方で、馬と娘の恋物語のコンテンツそのものは、遠野を中心に民話の「語り」となり、さらに演劇・絵画などのモチーフとなって、一般大衆に広がりを見せはじめている。この物語が、遠野の人々の心を深くとらえた背景には、馬と人とが一つ屋根の下で暮らす遠野の馬産文化や、動物との婚姻が自然に語られる口承文芸が育んだ精神世界、そして動物も人も対等な「魂」を持つ存在であるという伝統的な生命観があるのではないかと考えている。

参考文献

遠野市立博物館編『オシラ神の発見』遠野市立博物館 2000年
柳田國男『遠野物語』大和書房 2010年

観光施設「伝承園」の中の「おしら堂」(遠野市)





稲作を行ってきた日本の農事は、旧暦の季節区分である、24節気と密接に結びついています。こうした季節の節目に、田の神(農神、作神、亥の神)、山の神や祖霊神、養蚕神、道祖神、厄病神などを迎え、もてなし、送り返す、という一連の行事が農事の一環としての祭祀、祭礼として執り行われてきました。そして、ここでの馬の役割は、神の乗り物、あるいは祓といった、神と人とを繋ぐ事でした。それは生き馬の場合もあれば、藁、土、石、紙、野菜などの身近なもので作られた、形代としての馬や牛でもありました。

コトコト馬

コトコト馬をはじめ、「トヘトヘ馬」「ゴリゴリ馬」などは、中国地方を中心に正月に豊作を祈る予祝行事として継承されていました。岡山県高梁市有漢では、正月10日の夕刻、藁馬を持った子供や若者たちが、村の家々を訪れ、家人に見つからないように藁馬を、時には木製の農具を背おわせて玄関や縁側などに置き、戸や縁板をコトコトと叩きます。家人は「お馬さんが来た、良い馬売ってくれ」などと言いながら、鏡餅などに祝儀を添えて置いておきます。子供たちは祝儀を得、家人は藁馬を神棚に祀り一夜を過ごします。

翌日の大鍬初めの行事では、この藁馬を持ち、牛に耕鞍と新しい牛繩をつけ、「ヤレボーヤレボー(八重穂)」と声を出しながら苗代田に向かい耕作

の儀式を行います。その後、田に供物とお神酒と藁馬を置いて帰り、鍬はきれいに洗い餅を供えます。これは1年の農耕初めの儀礼の形です。

締張馬

正月15日サイノ神しめはりうまを祀る「どんど焼き」行事の終了後に、この締張馬ぬのひきのついた注連繩を、無病息災・家内安全・悪霊退散を祈願して、集落の方向に表を向けて吊るします。悪を馬の足で村の外に蹴りだし、ぞうりで踏み出すという意味もあるそうです。この集落には、二丈も地面に触れずに走るといふ羽茂城主 本間対馬守高貞の駿足の名馬「布曳」えびなにまつわる伝説があります。家老職の鮠名家の末裔は、400年後の今もこの名馬を守護神としてその面影を藁馬に託しています。



佐渡郡羽茂町大字締張・締張馬

高梁市有漢町・コトコト馬



春駒祭り・初午

春駒は、江戸時代には、正月に各家を廻る門付け芸でした、佐渡には現在でも門付け芸としての春駒踊りが残っています。2月最初の午の日は初午といい、もともとは五穀豊穡を祈願する日でしたが、稲荷信仰の縁日で、牛馬や蚕を祭るようにもなりました。群馬県・川場村門前地区では、養蚕神「金甲稲荷」の祭日に、春駒を持って女装した若者が踊り、各家を廻ります。山梨県塩山市では道祖神信仰(猿田彦)と結びついて、ホニホロ型(馬の首と尾を付けた作り物の胴に人が入り騎馬姿となる)の春駒踊りが伝承されています。沖縄にはチョンダラー(京太郎)と呼ばれる芸人の春駒芸があり、やはり胴に馬の首の形を付けます。この芸は組踊の「万歳敵討」の中に残っています。那覇には1月20日の新年行事として女の人たちが春駒芸を演じる行事もあります。

ねじ行事

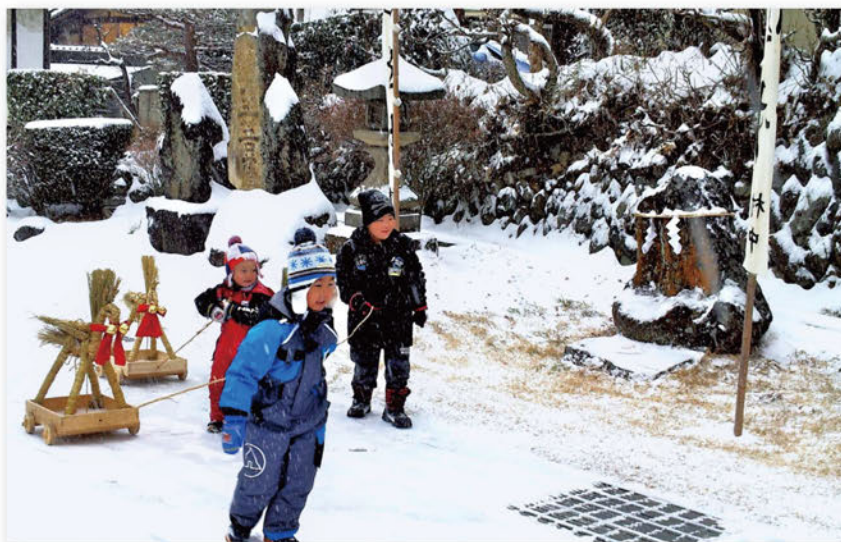
信州、とくに東部では道祖神祭りが「ワラウマヒキ」の習俗をとめない、各地に伝承されています。2月8日に行われる上田市真田町戸沢地区のねじ行事では、子供たちは「ねじ」を付けた藁馬を台車に乗せ引いて道祖神にお参りします。様々な色や形に美しく作られたお供物の餅「ねじ」は参拝者同士で交換し、風邪除けに食し、藁馬は家の屋根に投げ置かれます。「ねじ」は道祖神あるいは農神に穀物を献ずるという意味もあるのかもしれませんが。道祖神はところによれば、ドウロクジン、サイノカミ、あるいは猿田彦などと同一視される場合もありますが、コト八日に去来する神との関連性も指摘されています。



春駒祭りの春駒(馬形)



ねじ(ミミール企画提供)



戸沢のねじ行事



八戸市「かがりびえんぶり」での最終演目「摺り納め」(高坂 真氏提供)

えんぶり

初春に豊作を祈る予祝行事として、また芸能性の高い祭事として伝承されています。馬の首をかたどり鶴や亀、瑞獣などを描いた烏帽子を被った「太夫^{たゆう}」という踊り手が、笛、太鼓、手平鉦による囃子と、祝言風に田作りの状景をうたう歌に合わせて踊ります。先端に鳴子板や金輪をつけた「ジャンギ」と呼ばれる棒を持ちますが、これは田植前に田をならす(摺る)のに用いる農具「柄振・杓(えぶり)」に起源も持つといわれています。このことから、えんぶりは「踊る」ではなく「摺る」と表現されます。

コト八日

田の神は1年の内、秋から冬を山で山の神として過ごし、春から秋には田に居るという考え方は、農民に広く信じられてきました。田の神の迎え日を旧暦の2月8日(上弦月の日)、送り日を旧暦の12月8日(上弦月の日)とする地方が多くみられます。長野県松本市入山辺は果樹栽培や炭焼きが盛んに行われてきた地区ですが、午前中に「ワラウマヒキ」をして道祖神にお参りし、午後には地区でひとつ作られる大きな藁馬に貧乏神と呼ばれる1対の男女(ジジ、ババ)の藁人形と、草鞋・草履をのせます。「ピンボーガミ追い出せ」と囃しながら川端まで担いで送った後、河原で念仏を唱えながらこれを焼きます。

コト八日に去来する農耕に携わる神としては、山の神、田の神、作神、エビス、大黒、笹神などですが、特徴的なのは、貧乏神、風邪の神、魔物や妖怪などの厄神も訪れるとされる地域が多いことです。そのためか、この日は重い物忌(外出禁止、洗濯禁止、入山禁止など)を設けるところもあります。



入山辺蔵所コト八日の藁馬(三石 稔氏提供)

農神祭り

農神様をまつる習俗は、日本各地に残っています。中でも有名なのが、大和地方に継承される「農神祭り」や「野神祭り」です。天理市新泉町で行われる「野神祭り」では、藁製の馬、牛、ムカデが作られます。また、竹で雛形の農具も作られ、これを5月5日に男の子たちが区域内的の素盞鳴神社の境内に奉納します。境内の前に設けられた砂場（神田）を耕し土俵で相撲をし、頭屋では、炊いた米を四角い杓で押し抜き2段に重ねたものを、お神饌として牛頭天王に捧げます。

御田祭・御田植祭

農作業の工程を模擬的に演じ豊作を祈る神事であり、寺社や皇室の領田などで作り物の馬形や牛形を使う所が多い中、宮崎県・田代神社では水を張った田を、生きた牛馬で整地（蹄耕）し、代掻きをさせます。続いて神輿が担ぎこまれ、最後に古来の田楽神事が偲ばれる「催馬楽」のうたわれる中、揃いの緋に編笠を被った早乙女の田植えが行われます。神田の泥しぶきを浴びると無病息災が約束されるといわれます。



天理市新泉・野神祭り(松本純一氏提供)

白杵郡美郷町・田代神社 蹄耕と田植え神事



馬っこつなぎ

旧暦の6月15日は、田植えがひと段落した最初の満月の日に当たります。ここでは、田の神である牛頭天王を、津島神社の天王祭に合わせて送り返すために、2頭繋がれた藁馬が用意され、神社や井戸、田の水口に置く風習が見られます。この馬っこつなぎは、岩手県中部にわずかに残るもの

です。2頭は牡と牝、あるいは神馬と荷駄用馬ともいわれ、口に餅米の粉を溶いたシトギを葛の葉で包んだものを含ませます。藁馬の用意ができない者は、和紙に刻版した馬の絵を奉納します。水場に置くいわれは、牛頭天王が水神としても信仰されているからでしょう。



花巻市久出内馬っこつなぎ

虫送り

農作物の害虫を駆逐し、その年の豊作を祈願する年中行事のひとつで、初夏、あるいは泥落とし（農繁期の後の慰労会）のころに行われました。松明を焚きながら、悪霊をかたどった藁人形をかざして、鉦や太鼓をたたいて行列し村境に行き、川に流したり、焼いたりします。イナゴの発生時などには年に数回行ったといえます。かつては松明をリレー式に運び海へ虫を送って行くこともありました。『平家物語』では斎藤実盛が討たれる際、乗っていた馬が稲の切り株につまずいたところを討ち取られたため、実盛が稲を食い荒らす害虫（稲虫）になったとの言い伝えがあります。そのため、稲

の虫、特にウンカは実盛虫とも呼ばれ、虫送りのことを実盛送り（実盛祭）とも称し、騎馬姿の藁馬を作る地域もあります。



兵庫・虫送りの藁馬・馬の博物館蔵

七夕と馬

七夕は元来、中国の星祭りの行事でしたが、奈良時代からは7月7日が五節供のひとつになっていました。中国起源の織姫伝説、中国の手芸の上達を祈る宮廷行事、そして仏教の盂蘭盆会などが習合して、現代のかたちになったと考えられます。暦書の正月と7月に統一される以前、日本でも1年2期の区切は、春分の2月と秋分の8月であったと思われます。七夕の馬も8月の八朔などの行事が7月に繰り上がって七夕になり、8月の新年の行事も7月の盂蘭盆会に習合したのでしょう。

カヤカヤ馬

千葉県では昭和の半ばまで、旧暦7月7日にマコモやカヤを使って「七夕馬」と称する馬や牛を作り、子供達がこれに刈った草を背負わせて台車などにのせて引き、家に連れて帰る行事が盛んに行われていました。1日庭先に飾っておいた牛馬は、屋根に上げるか、荒神や屋敷神に納められました。

七夕馬

高知県でも新暦あるいは旧暦の七夕の日に、藁馬を飾って七夕を祝う風習が、中部域を中心にわずかに伝承されています。須崎市では農家の中庭に飾られますが、川の多い山あいの中土佐町や越智町では、両岸から縄で川の上を渡す大規模な飾りが施されます。飾りは地域によって多少異なりますが、撚縄（注連縄）には、藁の馬、手綱、房（ポウトウ）、木製のチギリ（経糸を巻く機織用具）、刀、畑でとれた野菜や花の他、5色の幣、藁犬などを吊します。村や地区総出の作業となるところもあり、七夕が年中行事では最大規模になることもあります。

中土佐町・七夕飾り



千葉県東金市・カヤカヤ馬



須崎市七夕飾り（竹中佳生子氏提供）



八朔と馬飾り

八朔^{はっさく}とは 8月朔日の略で、旧暦の8月1日を指します。この頃、早稲の穂が実るので、農民の間で初穂を恩人などに贈る風習が古くからあり「八朔。田の実の節供」とも言われました。(特別寄

稿「馬の精神史」2~4頁参照) また、博多地方では田の神に豊饒を祈願する「田誉め」などの儀礼も行われていました。八朔の祭りは、西日本に多く残っていますが、子供の「節供」として祝う風習は、福岡、香川、福山などで伝承されています。福岡県遠賀郡芦屋町では、「八朔の節供」として長男・長女の誕生を祝い、男児は藁馬、女児は米粉で作る「だごびーな(団子雛)」を家に飾る行事が、300年以上続いています。

また、香川県西讃地方では、「馬節供」と呼び、男児の成長を祈り、その地方で穫れた米の粉で「八朔団子馬」を作る風習があります。これは讃岐藩出身で馬術の名人として名高い曲垣平九郎に因んだものです。福山では木製の白馬を台車にのせて町中を引きまわす「八朔の馬出し」なども執り行われてます。



芦屋町・八朔の節供(井上和代氏提供)

十日夜・亥の子

亥の子祭りは関西ではもとは旧暦10月の初亥の日を祝った行事で、関東でも旧暦10月10日に十日夜祭りが行われます。両者とも夜間に藁鉄砲あるいは荒縄で縛った丸石で子供たちが地面を打つという共通点から、同一のものと考えられています。群馬県多野郡上野村では、子供たちが(かつては男子のみ)各家で作った藁鉄砲を持ち、地区の家々をまわって、掛け声とともに地面を叩き、家

人から祝儀をもらいます。邪霊を鎮め、土地の農神に力を与え作物の成長を祈る収穫祭り、あるいは田の神送りの祭事です。陰陽五行では、亥の月亥の日の夜という「極陰」に、陽である男子が陽のシンボルである突起物(藁鉄砲)で地面を叩くことにより、陰陽の調和をもたらすことが指摘されています。



上野村の十日夜

学生奉納農具絵馬

学術情報課程・学芸員コースでは、「資料を知る」「資料を見る」実習授業の一環として、農大コレクションの古農具を素描する時間を設けています。農具の用途、構造や美、日本農業の歴史について、目と手で確認する機会となっています。

今回の展示テーマに因み牛馬にかかわる古農具が素描の対象となりましたが、作品は絵馬として農の先人に奉納されます。

(学術情報課程教授・木村李花子)



午年に因む図書コーナー

「役畜」にかかわる書籍の書評作成

情報サービス演習について

学術情報課程の司書養成コースでは、「情報サービス演習」を4年次で実施しています。図書館における情報サービスは、利用者と図書館資料を結びつける基本的なサービスです。

この演習は、情報サービスの業務について理解を深めるとともに、構築されている資料を活用してもらえるように利用者への積極的な情報提供を行っていく必要があります。情報化社会での多様化した情報源に対し、利用者の要求に応じられるような情報リテラシーや図書館資料を利用者に活用してもらえるような、情報提供能力を身につけさせることを目的としています。

役畜関連書籍の書評作成

演習では、本の情報を分かりやすく提供するため、書評の作成も行わせています。今回は、食と農の博物館の企画展に参加するため、「役畜」に関する書籍の書評を作成しました。

書評とは、本の内容を紹介するだけでなく、その内容を分析して批評や評価したものを言います。書評の要素には、内容紹介、論点の提示、論点の論評などが含まれます。重要なのは、書評を読んで『本を読んでみよう』という気にさせることで、図書館資料の利用率向上が期待されます。

書評の出来映えの判定は、「書評バトル (ビブリオバトル)」によって行います。「書評バトル」とは、各自が作成した書評をクラスで発表し、どの本が一番読みたいと思ったかを投票で決めるものです。プレゼンテーションの技術力も影響しますが、書評が上手く書けている学生の得票率が高いのは言うまでもありません。学生達の発表を聞いていますと、農家が農業に対して誇りを持っていること、更にはその農業を支えてくれる役畜に深い愛情を注いでいることが理解できたようです。近年では、機械化が進み役畜の活躍する姿が見られなくなりましたが、その役畜を題材にした情報探索と情報提供の課題を実施したことで、我が国の農業のあり方を改めて考えたのではないのでしょうか。

(学術情報課程准教授・惟村直公)

「日本の馬と信仰」に関する書誌の作成

東京農業大学学術情報課程の図書館情報学分野では、「食と農」の博物館開館10周年記念画展「『農と祈り』-田の馬、神の馬」の開催にあたって、「午年に因む図書コーナー」として学生たちによる書評とともに、「日本の馬と信仰」に関する書誌の作成を行うこととしました。

後者については、私が担当する「図書館総合演習」（「図書館特論」との合併授業）の授業の一環として取り組みました。企画展の趣旨をよりよく理解してもらうため、さらに学び調べるために役立つ参考文献を提供できたらという観点から、このテーマを選んでみました。

私は常々、農大の学生が司書資格を取得したからには、各種の図書館・情報センターで理系の情報専門家として活躍してもらいたいと思っています。そのためには、先ず自分の専攻している専門分野についての知識を磨くことが基本となります。毎日の講義や実験・実習を通じて専門知識を得ることが重要であることは言うまでもありません。が、それには限界があります。その方面の専門家になるためにはさらに勉学を必要とします。やはり、自主的に自学自習をすることにより、講義や実験・実習の内容を深め、幅広い専門知識を得て真の専門家になる端緒が開かれるのだと思います。自学自習には、情報リテラシーやアカデミックスキルの習得が必要です。求める資料・情報を探し、自ら分析、評価し、適切なものを読み解き、活用する能力をもつ。そこから新たな知識が生まれ、新たな知的生産が行われるのです。

書誌データベースの検索

授業では、先ず全国的、総合的な書誌データの検索が可能になっている国立国会図書館の「国立国会図書館サーチ」、同館における図書、雑誌等の蔵書目録である「NDL-OPAC」、同館の巨大なパスファインダーである「リサーチ・ナビ」を検索します。さらに、国立情報学研究所の学術情報ポータルである「GeNii」に収録されている「CiNii」「WebcatPlus」「JAIRO」、科学技術振興機構の「J-GLOBAL」「J-STAGE」「J-Dream III」、加えて農林水産研究総合ポータルサイト「AGROPEDIA」の「AgriKnowledge」等も検索の対象です。勿論、検索には各データベースに固有のディスカバリーインターフェースや主題検索ツール（分類、件名、シソーラス）に通暁する必要があります。

こうして検索された書誌データから、今回のテーマに適合したデータを選び、その一つ一つについて実際の資料・情報にあたり、どのような内容なのか、調査・研究に対してどのような価値をもっているのか等について調査しメモをとります。そして、書誌データを分野別に分類し、事項別に排列しておきます。

専門・主題書誌の作成

次の段階は、蓄積された有用な書誌データから、最終的に今回のテーマに最も適切な書誌データを精選して書誌を完成させることです。

専門・主題書誌の作成は、学問や研究の最も基礎的な作業であり、それを地道にこなすことで、先行研究のレビュー、研究対象の確立、方法論の発見、問題意識の醸成、アイデアの発露等につながる非常に重要な作業と言えます。またこれは図書館サービスを行う司書には不可欠の基本的業務です。日頃から多くの専門・主題書誌を作成することにより、各種のレファレンス質問に即座に回答し、利用者の情報ニーズに適合した「図書館パスファインダー」の作成や調べ方を教示することができるようになります。

学生たちは、今回の企画展に参加する機会を得たこと、知的な楽しみを共有できることを素直に喜んでいきます。書誌の出来栄はともあれ、訪れる方々がこれを参考資料として活用していただければ望外の喜びであり、学生たちにはこの上ない励ましとなるでしょう。

（学術情報課程教授 那須雅熙）

展示品目録

	資料名	所蔵者
田の馬	上岡観音絵馬(妙安寺)、松倉山観音紙絵馬(素玄寺)、山の神講紙絵馬(複製:原品 奥三河郷土資料館蔵)、括り猿、牛頭天王護符(蘇民将来)各種、神社絵札各種(複製:原品 牛の博物館蔵)、神社お札各種、寺院御守各種、寺院御影各種、寺院お札各種、具象御幣各種(早馬神社、江釣子・八坂神社、鹿嶋神社、新山神社、平野神社)、ダイバ除け腹当、ダイバ除けお守り(復元)、丹生川上神社下社復元絵馬(原品 日笠フシダ遺跡出土)	東京農業大学「食と農」の博物館
	馬頭観音石像(複製)、南部絵馬(複製)、南部駒踊りの馬形、復元古式絵馬、馬養生雛形(江戸時代)、口割繩、馬の腸結石、河童駒引き人形	馬の博物館
	厩猿、猿の手	奥州市牛の博物館
	オシラ神(オコネサマ)	遠野市立博物館
	和書『牛馬放生仁徳誠』嘉永元年(1848)	東京農業大学図書館
神の馬	野神祭りのわら馬、わら牛、蛇、雛農具(奈良)、馬っこつなぎのわら馬(岩手)、七夕馬(高知)2種、かやかや馬(千葉)、お盆馬(神奈川)、八朔のわら馬(福岡)、十日夜の藁鉄砲(群馬)、締張馬(新潟)、コト八日のわら馬(長野)、コトコト馬(岡山)、ねじ行事のわら馬(長野)、春駒祭りの春駒(群馬)	東京農業大学「食と農」の博物館
	虫送りのわら馬(兵庫)	馬の博物館
	えんぶりの烏帽子(青森)	中居林えんぶり組
古農具	犁、えぶり、馬鍬、牛鍬、耕鞍、荷鞍、婚礼鞍、木製燈、馬銅葉桶、馬盥(スソアライ)、虻払い、馬鈴、馬わらじ(ウマクツ)、牛わらじ(ベコグツ)、スパイク、頭絡(タテゴ)、口籠、馬蓑、鼻取り竿(させ竿)、蒺、チギリ、籠、箕、押切	東京農業大学「食と農」の博物館
その他	映像「テラーガーミ」『久高島の年中行事』南城市作成(平成17年)奉納 古農具素描画(学芸員課程履修生作) 書評「活躍した役畜」(司書課程履修生作) 書誌「日本の馬と信仰」(司書課程履修生編)	

協力者及び機関

- ・秋葉 将 ・皆見 元久 ・中野 博 ・柳田 長寿 ・越智町教育委員会 ・津島神社 ・八戸市博物館
- ・井上 和代 ・片岡 秀夫 ・長谷川 浩 ・山澤 義和 ・鹿嶋神社 ・天徳寺 ・早馬神社
- ・今井 勝一 ・桑原 新作 ・馬場 勉 ・山中富三郎 ・川場村(踊り子の会) ・東京農業大学図書館 ・平野神社
- ・今井 嘉之 ・川田 啓介 ・牧内 勝年 ・上田市商工観光部観光課 ・観世音寺 ・遠野市立博物館 ・廣峯神社
- ・上田 京司 ・高坂 真 ・前川さおり ・上野村教育委員会 ・清荒神清澄寺 ・仲土佐町役場 ・馬居寺
- ・小野寺キク子 ・杭田 正 ・松本 純一 ・馬の博物館 ・興禅寺 ・中山寺 ・松尾神社
- ・浦田 穂一 ・小島 瓊禮 ・三石 稔 ・大和神社 ・寂光院 ・長等神社(馬神社) ・松本市立博物館
- ・鮫名 雪江 ・塩谷 陸男 ・宮島 幸男 ・江釣子・八坂神社 ・素玄寺 ・南城市教育委員会 ・八坂神社
- ・小澤 政明 ・志田 定幸 ・宮島 隆志 ・奥州市牛の博物館 ・高梁市役所有漢地域局 ・新山神社 ・大和坊
- ・小野 光一 ・竹中佳生子 ・宮島 久雄 ・大津市歴史博物館 ・中居林えんぶり組 ・丹生川上神社 ・山辺神社
- ・岡崎みよ子 ・十河 久 ・安井 敏夫 ・奥三河郷土館 ・仲仙寺 ・馬事公苑 ・横倉山自然の森博物館

開館 10 周年記念展示：農と祈り ―田の馬、神の馬―

In Prayer and in Plough: The Presence of Horses and Cattle in Fields and Shrines

期 間：2014年3月28日～9月15日

場 所：東京農業大学「食と農」の博物館 1階 企画展示室
Food and Agriculture Museum, Tokyo University of Agriculture
www.nodai.ac.jp/syokutonou

開館時間：10:00～17:00 (3月中は16時半まで：入館は閉館時間の30分前まで)

休 館 日：月曜日 (月曜日が休日の場合は火曜日・毎月最終火曜日・大学が決めた休日)

入 場 料：無料

オープニングセレモニー：平成26年3月28日(金) 11:00～

講 演：各日とも14:00～ 博物館2階・セミナー室

4月19日(土) 「馬の宗教的機能」小島瓊禮 (琉球大学名誉教授)

5月10日(土) 馬と人の恋～『遠野物語』とオシラ神をめぐる

前川さおり (遠野文化研究センター学芸員)

6月14日(土) 「日本の馬とその周辺」木村李花子 (東京農業大学教授)

7月12日(土) 「厩猿」川田啓介 (奥州市牛の博物館上席主任学芸員)

ギャラリートーク：各日とも14:30～

4月20日(日)、6月22日(日)、8月10日(日) 黒澤弥悦(東京農業大学教授)

5月18日(日)、7月20日(日)、9月 7日(日) 木村李花子

午年に因む図書コーナー：1階企画展示室

「書評 ―活躍した役畜」 「書誌 ―日本の馬と信仰」

主 催：設立10周年記念特別企画展示実行委員会

委 員 長：大林宏也 **副委員長**：額田恭郎

委 員：黒澤弥悦、木村李花子、那須雅照、惟村直公、安田清孝、西嶋 優、中垣千尋、井関 恵

展示・催事のお知らせ

■企画展示

開館10周年記念展示 第2弾「バイオミメティクスを超えて！」―昆虫などの生き物や自然に学ぶものづくり―

【期間】平成26年10月1日(水)～平成27年3月15日(日)

【主催】東京農業大学農学部農学科

【企画】東京農業大学農学部農学科昆虫学研究室 (長島孝行指導教授と所属学生)

■常設展示

【1階展示室】東京農業大学の紹介 (2人の学祖、建学以来の歴史等)、古農具コレクション

材鑑標本、横井時敬初代学長関連資料、進化生物学研究所コレクション 他

【2階展示室】古民家の再現ジオラマ (平成26年3月28日に展示開始)、ニワトリの剥製標本コレクション、住江金之コレクション (色々な酒器)、農大卒業生の蔵元紹介